

発表3

〈死体なき墓〉と墓参—宮城県岩沼市の被災墓地

東北大学大学院 小田島 建 己

はじめに

一概に「墓」といっても、その語が使われる状況によって、意味するものに若干の違いがある。例えば、「墓を洗う」、「墓に蒲団は着せられず」、「墓を掘る」、「墓を買う」、「お墓まいりに行く」と言ったときの、それぞれの「墓」が厳密に同じではないことが指摘されている〔井之口 1988、279-280〕。「墓」は石碑、石塔（墓石）のことを意味することもあれば、遺体を埋葬するために掘られた穴（墓穴）を意味することもあり、また墓石とそれを建てる土地を含めて意味することもある。

では、「津波に流された墓」といった場合は、この「墓」が意味するものは何であろうか。流されるモノとして墓石のイメージが先行しそうではあるが、それが建っていた地面（土）も同様に浚われるイメージを伴うのではないだろうか。さらに言えば、流されたものは、墓石や土だけではなく、墓石の下に納められていた死者の（生前の）身体（遺体・遺骨）も含まれる。火葬が主流となっている今日において、「墓」の流出は、墓石やそれが建つ土地の流出に止まらず、そこに埋蔵されていた火葬骨の流失をも意味する。

ところで現在効力を持っている「墓」に関する法律は、1948（昭和23）年に公布・施行された「墓地、埋葬等に関する法律」（以下「墓埋法」とする）であり「墓地、納骨堂又は火葬場の管理及び埋葬等が、国民の宗教的感情に適合し、且つ公衆衛生その他公共の福祉の見地から、支障なく行われること」を目的として制定された【第1条】。この法律では、「墓」（法律の表現上は「墳墓」である）は、「死体を埋葬し、又は焼骨を埋蔵する施設」と規定されており【第2条第4項】、この「墳墓」を設けるために「都道府県知事（市又は特別区にあっては、市長又は区長。以下同じ。）の許可を受けた区域」が「墓地」とであると定められている【第2条第5項】。言うなれば、「墓」は「死体を埋葬」する場所であるという見解が、この法律の制定に先立って、「国民の宗教感情に適合」するもとの考えられていたのであろう。

「墓」と人々の信仰

四九 現在当たり前のように考えられている、死体の埋葬地上に角柱の石塔が建てられる墓は、実は近世あたりから普及・浸透してきたものである。また、石塔の形の変化に伴い、その意味付けも変化している。そもそもは仏を表象する石塔を供養することにより、その功德を、その下に埋葬されている故人に振り分ける追善供養の仕組みをもっていた〔藤井 1988、103-104〕。しかし火葬の普及により個人墓からカロウトを持つ家墓へと変化し、石塔から仏を表す像や種子が無く

なり、替わりに家紋や「〇〇家之墓」というように記される墓標になった現在においては、こうした間接的な供養の形式はもはや方便としても有効でなく、直接的に故人を供養しようと墓参がなされ、墓に供物が供えられる。つまり今日みられる一般的な墓参と、墓参が伴う一連の行為（墓石を洗う、物を供える、手を合わせるなど）は、必ずしも仏教教義に沿わない、人々の信仰の表れとして捉えることができる。

ところで、人々が仏教や神道やキリスト教といった組織だった宗教の教義的な信仰とは必ずしも一致しないかたちで独自に持っている信仰を指すために、「民間信仰」という術語が頻繁に用いられてきた。この術語は、宗教学者の姉崎正治〔1873～1949〕が1897（明治30）年に発表した論文「中央の民間信仰」において、初めて用いられた。姉崎は東京帝国大学を1896（明治29）年に卒業すると、その翌年の5月から宗教の調査および宗教的事物の収集を目的として、東北（主に旧盛岡藩領と旧仙台藩領）を旅行している。そこで姉崎が遭遇した人々が実践する信仰を指し示すにあたって、「民間信仰」という語を造ったのである〔姉崎 1897、996〕。姉崎が言う「民間信仰」は、「多少正統の組織宗教と特立したる信仰習俗」であり、「正統の組織宗教」を独自の解釈により「変化、曲解、混淆」したものである〔姉崎 1897、997、998〕。

姉崎が言うような（中央の）正統な宗教を歪めてできた（地方の）民間信仰という対立的モデルに対し、東北大学においても宗教学の教鞭をとっていた堀一郎〔1910～1974〕は、「民間」という概念を再考することにより、「民間信仰」を捉え直している。姉崎は、東北への旅において「民間信仰」を見出しており、その「民間」とは、すなわち東北の人々であり、姉崎の言葉を借りれば「古より文化洽ねからざる辺陬の地」の人々、つまりは洗練されていない片田舎の人々である〔姉崎 1897、995〕。一方、堀は「民間」を「実はあらゆる階層の中に程度の差をもって分担されている「常民性」(popularité)として考えるべきもの」だと指摘している〔堀 2005 (1951)、47〕。どこの誰にでも、程度の差こそあれ、「常民性」があって、だからこそ、その「常民性」によって実践される信仰が「民間信仰」たり得るという視点の転換がなされている。

こうした「民間信仰」論に対し、やはり東北大学で宗教学の教鞭をとっていた楠正弘〔1921～2009〕は、そもそも担い手の性質を前提とする「民間信仰」へのアプローチを疑問視し、むしろ人々が実践する信仰から、それを担う人間性を捉える方向へ転換している〔楠 1977、115～116〕。その上で、楠は「民間信仰」を「庶民信仰」と改め、特定の人々（例えば無学・文盲や田舎の人など）が持つ迷信じみた信仰という理解を払拭しようとした。楠の「庶民信仰」論で特に着目すべきは、ある信仰が「庶民信仰」なのではなく、人々の動態的信仰現象、その在り様が、「庶民信仰」だという点であろう。楠の見解では、時に呪術的、時に宗教的、また時に世俗的、時に非世俗的、あるいは時に教典的、時に経験的、さらには時に機能的、時に非機能的というような、四
八ある軸の極から極へと揺れ動く信仰の動態こそが、「庶民信仰」の根幹なのである〔楠 1984、15～17〕。

津波により現出した〈死体なき墓〉

さて、こうした視点から墓制に係る習俗を見直すと、時代の変化にも影響され、教典的と経験的、機能的と非機能的といった極の間を揺れ動いていることに気づく。2011（平成23）年3月11日に発生した東日本太平洋沖大地震は、津波を引き起こし、そして原発災害も惹起し、いわゆる東日本大震災を巻き起こした。この一連の震災被害には、津波により流された墓の被害も含まれている。被災地の一つである宮城県岩沼市では、被災の程度が特に大きかった3つの墓地がある。それらは、北から順に、相野釜集落にある相野釜共葬墓地、二野倉集落にある須加原共葬墓地、蒲崎集落にある浜里共葬墓地である。ちなみに、これらの集落（他に藤曾根集落、長谷釜集落、新浜集落も合わせた6集落）では、津波による被害が甚大であり、集団移転が決まっている。

震災発生から差ほど日数が経つ前から、これらの墓地の復旧作業が進められてきている。復旧を進めている主体は墓地の利用者であり、したがって、震災前にその集落に居住していた（元）地区住民である。相野釜墓地は津波により土地そのものも壊滅的被害を受けたため、土地の造成と墓の区画割りが改めてなされ、復興が進められている。須加原墓地は被災3墓地の中でも取り分け早くから復旧作業が着手され、震災発生から1カ月経つ前に、地区の住民が自らの手で、地面を均し、墓石を建て直している。浜里墓地も着々と復旧が進み、墓の区画の大半では、墓石が建て直されている。とはいえ、墓（区画）によっては、まだカロウト（焼骨を納めるために墓に設けられたスペース）が剥き出しのまま残され、津波の痕跡を顕な所もある。

墓を襲った津波は、そこに立っていた墓石を押し倒しただけではなく、墓石の下にあるカロウトを露出させ、そこに納められていた焼骨を流失させてしまった。端的に言えば、津波によって〈死体なき墓〉が現出してしまったのである。はじめにみたように、現行の「墓埋法」では、「死体を埋葬し、又は焼骨を埋蔵する施設」が「墓」であり、したがって、焼骨が流れてしまった墓は、この法律上は既に「墓」として機能していないことになる。海岸の松林や、家々を押し流した津波は、墓地をも押し流し、さらには、墓が「墓」たる所以も押し流してしまった。

「詣り墓」という〈死体なき墓〉

とはいえ、〈死体なき墓〉は、津波に被災した墓地に限られるわけではない。よく知られている〈死体なき墓〉としては、「両墓制」における「詣り墓」を挙げることができよう。「両墓制」とは、死体を埋葬する「埋め墓」とは空間的に異なる地点に、死者を弔い供養するための「詣り墓」を設ける習俗である。この習俗は、特に近畿地方に濃密にみられるものの、関東地方から九州地方まで広く分布している。何をもち「両墓制」とするかは議論の多いところでもあるが〔新谷 1991、2-11；藤井 1993、406-409〕、死体を埋葬する「墓」と、それとは別に墓参の地を設けていた事例は、実は東北地方においても、数こそ多くはないが、散見することができる。

例えば、山形県米沢市のある集落では、集落の中心地から東に数メートル入ったところにお堂（おそらく阿弥陀堂）が立ち、その周囲に墓石が立ち並んでいるが、ここは「詣り墓」であり、

死体は埋葬されていない。これらの墓石には、家墓と個人墓の両方があり、古いものは安政期のものもある。死体を埋葬していた「埋め墓」は、集落の北側に位置し、そこに広がる林の根本付近が埋葬の地であったという。

他にも、山形県の旧温海町（現在は鶴岡市）のある集落では、集落内にある寺の境内の墓が「詣り墓」で、集落の外れにある小高い丘の斜面に死体を埋葬し、埋葬した地点には直径20cmから30cmほどの大きさの自然石を置いていた。これらの両方の事例では、2つの墓が設けられたそもその理由は忘れられており、現在は知ることができない。また米沢市の事例では、今日のお盆の墓参りは必ず両方の墓に対して行われ（したがって「埋め墓」は「詣り墓」でもある）、温海町の事例でも、お盆の際に「埋め墓」にも参る人が少なくない。要するに、「両墓制」が成立する原因として盛んに議論されてきた死体の穢れというものが、米沢市と温海町の事例の現在においては、あまり明確に意識されていないようである。

おわりに

津波による墓地の浸食では、墓石（石塔）の下に設けられたカロウトの内部が洗われ、そこに納められていた焼骨が流失したケースも珍しくない。津波から1年半近く経った2012（平成24）年のお盆の時点には、被害が極めて甚大であった墓地でも、区画が再整理され、順次新たな墓石も建立され、外観だけは「墓」となっているものがみられている。とはいえ、繰り返しになるが、カロウトから骨を失った墓は、現行の方に従えば厳密には「墓」ではない。しかしながら、同時に、こうした〈死体なき墓〉は、死体を埋葬する地としての機能は失っているものの、またそのために法的にはもはや「墓」ではないものの、相変わらず墓参の地としてそこに参る（詣る）人々には認識されている点を指摘できる。さらには、墓石が未だ再建されておらず、空のカロウトが剥き出しのままの区画でさえも、供物が置かれ、墓として、死者の居場所として、そして墓参すべき場所として認識されていることがわかる。

「両墓制」が成り立つ前提として、「死者の肉体と靈魂は容易に分離し得るとの思想」が指摘されている〔堀 2005（1951）、225〕。死体の埋葬地は、必ずしも死者の居所ではなく、死者を祭祀する地にこそ死者（の霊）が居るのだと考えることが、「両墓制」を支えていたと換言できる。こうした考え方がある一方で、2003（平成15）年に日本全国の満20歳以上の男女2000人を対象になされた意識調査では、27.7%の人が「死後の靈魂はどこにいますとお考えですか」という問いに対して「墓」と答えている〔森 2005、118〕。「肝試し」の場所として墓地が連想されることも、日常的にはおそらく珍しいことではなく、そこにも、「墓＝死者の居所」という図式が読み取れよう。

近代以降、行政は「墓」を「埋葬の地」として規定してきた〔森 2003、205－211〕。「墓」が死者の居所として意識されるのは、そこに死者の（生前の）身体が埋葬（埋蔵）されていることに少なからず影響されている。しかしまた、こうした意識も、常に固定されているものではなく、時と場合によって揺れ動くものであることが、墓制の習俗をみることで理解できる。あるい

は、こうした揺らぎがあるからこそ、津波に流され、「墓」ではなくなった被災地の墓も、死者の居所として墓参の対象たりえるのかもしれない。

引用・参考文献

- 姉崎正治 1897 「中奥の民間信仰」『哲学雑誌』12 (130)
- 井之口章次 1988 「墓所と霊」 藤井正雄編『仏教民俗学体系4 祖先祭祀と葬墓』 名著出版
- 楠 正弘 1977 「庶民信仰の構造」 脇本平也 編『宗教と歴史』 山本書店
- 楠 正弘 1984 『庶民信仰の世界』 未来社
- 新谷尚紀 1991 『両墓制と他界観』 吉川弘文館
- 鶴岡高等学校郷土クラブ 1952 「山形の両墓制」『民間伝承』16 (1)
- 南原郷土史編纂会 1987 『南原郷土のあゆみ』 南原郷土史編纂会
- 藤井正雄 1993 『祖先祭祀の儀礼構造と民俗』 弘文堂
- 堀 一郎 2005 (1951) 『民間信仰』 岩波書店
- 森 謙二 2003 「明治初年の墓地及び埋葬に関する法制の展開 ―祖先祭祀との関連で―」
藤井正雄・義江彰夫・孝本貢編『家族と墓 [新装版]』 早稲田大学出版部
- 森 謙二 2005 「死者と追悼をめぐる意識調査」『死者と追悼をめぐる意識変化 ―葬送と墓
についての統合的研究―』 平成14年度～平成16年度科学研究費補助金 (基盤研究 (A)
(1)) 研究成果報告書 研究代表者 鈴木岩弓